

## フィールドワーク便り

# 快走するグラフィティ —ナイロビの個性化するマタトゥ事情—

池 本 春 美\*

ケニアの首都ナイロビには、政府機関、ホテル、会社の事務所などの高層ビルが林立し、そのあいだを車や人びとの込み合った流れが行き交う。道端では古着や雑貨を並べる行商人が大声で客を勧誘し、車のクラクションや人びとの会話のさざめきなど、騒々しいほどにぎやかな物音が街中を包む。ここナイロビはケニアの政治・経済・文化の中心であり、大勢の人やものでごったがえす大都会だ。

ナイロビ市内の車道では、派手な絵柄に包まれた車が高速で走り回っている。これは、スワヒリ語で「マタトゥ (*matatu*)」と呼ばれ、主要な道路を運行する乗り合いバスである。その大きさはワンボックスカーほどのサイズからトラックほどのものまである。ボディーには、歌手の顔を表す絵や、まるで暗号のように不可解な文字列などが描かれており、どこことなく、路地や外壁にスプレーで書き出されたいたずら書き—「グラフィティ」と呼ば

れる大衆的な芸術—のような印象を受ける。マタトゥという乗り物は、現代の若者を中心とする独特の文化の一部であり、ナイロビの街をカラフルに彩りながら駆け巡っている。

ナイロビ市内を移動する便利な方法は、マタトゥのほか、電車、バス、<sup>1)</sup>「トゥクトゥク (*tuk-tuk*)」と呼ばれるエンジン付きの三輪タクシー、「ピキピキ (*pikipiki*)」もしく



写真1 さまざまな車両があふれるナイロビの街

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 「マタトゥ」と「バス」は、ともに乗り合い自動車であり、ケニア人はこの2つの言葉を以下のように使い分けているが、両者を明確に区別することは難しい。一般的に「バス」とは、「ケイビーエス (KBS: Kenya Bus Service)」や「シティ・ホッパ (Citi Hoppa)」, 「ダブル・エム (Double M)」といった大資本のバス会社が運行している大型の乗り合い自動車であり、車体には会社名のロゴが記載されているものの、派手な絵柄が描かれることはない。それに対して「マタトゥ」は、トヨタ・ハイエースほどのサイズのものが多く、かつ個人によって運営されているものが多い。



写真2 派手な絵柄が描かれたマタトゥ



写真4 客待ちをするトゥクトゥク



写真3 バス会社が運営するバス



写真5 人目を引くマニャンガ型のマタトゥ

は「ボダボダ (bodaboda)」と呼ばれる二輪のバイクタクシーなどがある。タクシー業も発達しており、従来どおりに街角などで客待ちをするものに加えて、「ウーバー (Uber)」、「タクシファイ (Taxify)」、「リトル・ライド (Little Ride)」といった、スマートフォンのアプリケーションを利用したサービスがある。これらの移動手段のなかでもマタトゥは、特に多くの人が日常的に利用する公共交通機関である。

マタトゥは、ほかにも複数の呼び名があり、「シェン (sheng)」という若者言葉では「マスリー (ma-three)」あるいは「マツ

(mats)」と呼ばれている。また、車両の大きさによって、「プロボックス (probox)」や「ニッサン (nissan)」と呼び分けられている。マタトゥのなかには、白地の車体に黄色い線という素朴な外観のものもあれば、塗装や電飾などの目立つ飾りをつけたものもあり、外観の目新しさによって呼称が異なる。少し古びた印象を与えるものは「ワンゴラ (wangora)」と呼ばれる一方で、意匠を凝らしたデザインを装ったマタトゥは「マニャンガ (manyanga)」と称えられる。ここでは、特にグラフィティを施されたマタトゥについて記述する。



写真6 チェ・ゲバラなど有名人が描かれたマタトゥ

フィールドワークが中盤を迎えた2018年1月に、わたしは車の修理場を訪れた。それはナイロビ市内の東部に位置する「ブルブル(Buruburu)」と呼ばれる地域にあった。この一角にはたくさんの修理場があり、タイヤやホイール、そして車の修理に必要な部品を販売する小さな店舗が並んでいる。工業化が進むケニアの都市近郊では、このような「ジュア・カリ」(スワヒリ語で *jua kali*, 熱い太陽の意)と呼ばれる小規模な商売がよくみられる。ジュア・カリは、賃金や生産性、労働時間など、労働条件や雇用形態が不安定であることが多く、インフォーマル・セクターという非公式の経済部門に分類される。

わたしが訪問した修理場には、およそ20台のマタトゥがところ狭しと並べられ、事故や故障、電飾の改造など、それぞれの問題が処置される順番を待っていた。修理場で働く「フンディ (*fundi*)」と呼ばれる修理工たちは、上下つなぎの作業服を着て、車両と車両のあいだの狭い空間を移動しながら作業に取り掛かっている。フンディのひとりであるK氏は、ナイロビにある「ケニア・ポリ

テクニック」という科学技術専門学校でグラフィック・アートを勉強したのちに、マタトゥに絵を施す職に就いたという。40代のK氏には、現在20代の男性が見習いとしてついている。

訪問時にK氏は、あるマタトゥに取り掛かっており、わたしはその作業過程を見学した。そのマタトゥは、操業中にほかの車と衝突したために搭乗口の手すりやぐにやりと曲がり、ボディーには衝撃によって多くの傷が入っていた。注文者からは「損傷した部分を修理して、表面には特に女性たちの顔を描いてほしい」との要望があった。

注文を受けたK氏は、まず自宅で下準備をおこなった。インターネットを通して世界的に人気な歌手「テイラー・スウィフト(Taylor Swift)」および「リアーナ(Rihanna)」の画像を入手し、A4サイズ用の紙に印刷した。その後にK氏は、自宅で所有している特別な機械を使って、A4の画像を模造紙のような大型の用紙に印刷して、これを下書きとした。

つぎにK氏は職場での作業に取り掛かる。古新聞とテープを用いてマタトゥの窓部分などの顔料が付着してほしくない部分を覆い隠す。そして、マタトゥにもともと描かれていた絵の上にスプレーで白色の顔料を塗って、もとの絵が見えないように消す。つぎは、白くなった表面をやすりでこすってざらざらにして、顔料がより定着しやすい状態を作る。そして紺色のカーボン紙の上に下書きの紙を重ね合わせ、ボディーにテープで固定する。そうして、描いてある下書きのとおり鉛筆

でなぞってゆくと、カーボン紙をとおして白い部分に絵柄が写される。この作業を「トレシング (tracing)」と呼ぶ。

つぎは絵柄を彩色する作業である。白い表面に茶色や黄色の顔料を混ぜ合わせた肌色の顔料をスプレーで掛けて、モデルの目鼻の陰影をつけてゆく。このときK氏は、はじめに印刷した見本の画像をそばに貼り付けて、それに時々目をやって確認しながらスプレーを塗布する。顔料は、複数の色とシンナーを混ぜ合わせて、希望の色を作り上げる。顔料



写真7 スプレー塗装の途中経過



写真8 作業が完成した絵

の原液は近くの商店で販売されており、握りこぶし大ほどの容器のものが約50ケニアシリング (53円)<sup>2)</sup> である。この作業を繰り返すと次第に絵柄ができあがってゆく。K氏は、およそ2日間かけて1台のマタトゥーに3つの絵を描き上げた。

マタトゥーは、外観だけでなく、内部の設備にもこだわりがみられる。音楽を大音量で流すスピーカーに加えて、大型の液晶画面を備えているマタトゥーも多く、なかには、座席の背面にそれぞれ小型の液晶画面が備え付けられたものもあり、若者に人気の楽曲の動画や「どっきり」番組の映像が放映される。壁面には有名な歌手の顔写真や、イエス・キリストの祈る姿絵とともに宗教的な言葉が描かれていたりする。また、乗客が携帯電話を充電できるようなコンセントを設置しているものや、Wi-Fiネットワークの名前とパスワードが記載されているものもある。

こうしたさまざまな装置は、マタトゥーの運転席で調整される。運転席の前にあるディスプレイには、防犯カメラを設置した後部座席の映像が映し出されている。「デレバ (dereba)」<sup>3)</sup> と呼ばれる運転手は、乗客の入り具合を確認しながら、スイッチがたくさんついた機械を巧みに操り、USBフラッシュメモリーにコピーしている音楽から選曲して、車内に流す。このようにマタトゥーには、外見・内面ともに、2つとして同じものをみつけることができないほど、どれも独創性に富んだ工夫が施されている。

2) 1ケニアシリング=約1.05円。

3) 英語の「driver」に由来し、スワヒリ語ではこのように表記される。



1台のマタトゥーには、デレバのほかさまざまな役割をもつ人びとが関わっている。乗車するときは、まず乗り場で乗客を呼び込む「マナンバ (*manamba*)」に接し、続いて車内に乗り込むと、運賃を集金する「コンダクタ (*kondakta*)」<sup>4)</sup> がいる。今回、聞き取りをおこなった路線では、デレバはだいたい1日につき2,000 シリング (2,100 円)、コンダクタは1日1,500 シリング (1,575 円)、マナンバは1回の乗り降りにつき100 シリング (105 円) ほどの収入があるという。

あるマタトゥーの1日の出費をみると、洗車に200 シリング (210 円)、マタトゥーの所有者に3,000 シリング (3,150 円)、ガソリン代に2,800 シリング (2,940 円)、整備不良や乗客の定員を超過した罰金として警察への支払いに1,500 シリング (1,575 円)、「サッコ (*sacco*)」と呼ばれる組合には1,900 シリング (1,995 円) を支払い、以上の出費は、1日あたり9,200 シリング (9,660 円) になる。1年あたり70,000 シリング (73,500 円) ほど支払って任意保険に加入し、事故などの出費に備えているものもある。その日暮らしの生活をしている者が多く、不慮の事態で車が使えなくなると収入が途絶えてしまうという。

華やかな様子のマタトゥーだが、危険もはらんでいる。乗客を装った泥棒がおり、鞆などから貴重品を抜き取ることがあるそうだ。マタトゥーの運転が荒っぽいことは有名で、事故によって多くの命が失われてきたこ

とも事実である。いくつかのマタトゥーの内部では「危険な運転に対して抗議しよう」、「Over speeding+over lapping=death. Speak up to avoid accidents」などと呼びかけるステッカーが貼られているのを見た。これは「ズシャ! (*Zusha!*)」というキャンペーンで、アメリカ合衆国国際開発庁 (USAID) の資金援助を受けて広がっている。交通事故で失われる命を減らすための取り組みのひとつである。



写真9 運転席に搭載された液晶画面

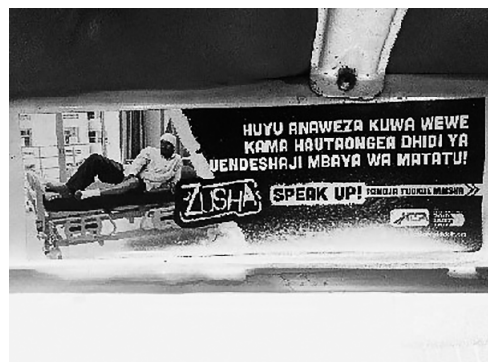


写真10 安全運転を啓発する「ズシャ!」のステッカー

4) 英語の「conductor」に由来し、スワヒリ語ではこのように表記される。若者言葉 (シェン) では「マカンガ (*makanga*)」と呼ばれる。

色彩に富み、刺激的な飾り付け…、陽気な音楽があふれ、活力がみなぎる車内…。ナイロビのマタトゥは唯一無二の個性を心ゆくま

で表現し、日々、進化を遂げている。人びとの注目を集め、毎日の暮らしを支えながら、今日もありったけの力で街なかを馳せてゆく。

---

## アジア人学生と若手研究者のための 「京滋フィールドスクール 2017」の概要と意義

倉 島 孝 行 \*

### はじめに

2017年11月上旬、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）と東南アジア地域研究研究所（CSEAS）は、京滋地方を研修先としたフィールドスクール・プログラムを実施した。参加者はブータン、ミャンマー、ラオスの5大学に属する大学生、大学院生、若手教員・コンサルタントら31名で、<sup>1)</sup> このうち、特に22名をASAFASへの短期交流学生としても受け入れた。彼/彼女らの専攻は、多様な学部・学科生が混在したブータンを除き、農林学系からなった。また、本学側のプログラムの企画・運営は竹田教授、安藤准教授（当時）、赤松連携助教、報告者が担当した。このほか、河野 CSEAS 所長（当時）と太田 ASAFAS 研究科長（当時）が懇親会とワークショップでそれぞれ本学を代表して式辞を述べられ、附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センターが研修生

の各レポートを編集し、ASAFAS の成果報告集『創発』から刊行する業務を担った。

以下ではこうしたプログラムの概要と研修生が提出したレポートに対する報告者の所感を紹介したうえで、プログラムの中で報告者が目にしたある出来事と、それをもとに小考した点について簡単に述べてみたい。それらはある研修生らがとった地域の現実とズレた行動と、本プログラムがそのようなズレの自覚・修正を彼/彼女らに促すきっかけとなり得たかもしれないという点である。

### プログラムの特徴・目的・内容

ASAFAS に属するにせよ、CSEAS に属するにせよ通常、両組織の教員・学生らは、こちらから各国調査地に出向き、それぞれの現実や動態を調査することを主とするが、本プログラムの特徴は各調査国の学生や若手研究者を本邦に招き、我が国の現実の見聞、地域

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 31名の国別内訳はブータン10名、ラオス6名、ミャンマー15名であった。

表 1 京滋フィールドスクール 2017 の最終プログラム

日程 / 活動地	午前 / 午後	活動内容
11/1 大阪府		参加者来日.
11/2 京都府	午前	京都大学にて竹田・安藤両教員によるフィールドスクールに関する趣旨・行程説明.
滋賀県	午後	守山市コミュニティ防災センターおよび環境センターの視察と両所職員による業務説明, 質疑. 歓迎レセプション. 守山市宮本市長および CSEAS 河野所長の挨拶聴講.
11/3 滋賀県	午前	守山市今浜地区, 三崎地区にて両子供会・自治会と合同植樹活動ならびに交流. 今浜・三崎両地区の集落および営農地域視察.
	午後	美崎地区婦人会提供の郷土料理等で同地区自治会と食事会. 滋賀県立琵琶湖博物館の拝観と琵琶湖環境問題に関する講義(英語)の受講. (琵琶湖博物館専門学芸員中井克樹博士「琵琶湖の生物多様性と外来種対策」)
11/4 京都府	午前	京都府美山町かぶやきの里視察と同地区の現状, 歴史の説明受講. (CSEAS 赤松芳郎博士および普明寺住職)
11/5 福井県	午前	小浜市上根来地区の廃集落視察. 小浜市鯖街道博物館拝観と同商店街視察.
京都府	午後	宮津市にて天橋立参観(宮津美しさ探検隊森林インストラクター赤松富子氏による案内).
11/6 京都府	午前	天橋立侵食問題と背景説明(CSEAS 赤松芳郎博士)の受講.
	午後	京都市嵐山周辺地域(竹林と角倉了以像等)および金閣寺視察.
11/7 京都府	午前	京都大学にて各参加者レポート作成. 安藤教員によるレポート作成法講義聴講.
	午後	ASAFAS 太田研究科長の歓迎挨拶および研究科に関する説明聴講. 各参加者レポートのグループ別集約および各グループ代表者による発表. 京都大学カンフォーラにて送別会.
11/8 京都府	午前	京都市清水寺, 平安神宮拝観.
	午後	商業施設(イオンモール京都)視察.
11/9 大阪府		参加者帰国.

住民らとの交流を通して, 彼/彼女らに自国の状況を客観視する機会を提供することになった. なかでも, 本学企画・運営者らの研究領域が東南アジアや南アジアの地方都市や農山村での環境管理, 開発実践であることから, 本邦でも同様の場所・活動領域に属する施設の視察, 村興しの実践者などとの交流が企画された.

では実際, 研修生らはどんな場所に行き,

何を見聞し, どのような人々と接したのか.

表 1 は本フィールドスクールの最終プログラムである. 移動の車中での簡単な講義, ごく短時間の施設訪問, 一般的な観光などを除き, 本スクールの主だった活動は, 次の内容からなった. 1) 滋賀県守山市の消防署視察とその業務説明の聴講(写真 1), 2) 同市ゴミ処理センターでの同種活動(写真 2), 3) 同市今浜・三崎地区での自治会・子供会との



写真1 守山市内コミュニティ防災センターでの集合写真



写真3 守山市今浜・三崎地区での自治会・子供会との合同植樹



写真2 守山市内環境センターでの講義受講



写真4 安藤教員による集合意見形成法講義

合同植樹（写真3）、4）滋賀県立琵琶湖博物館視察とその環境問題に関する講義の受講、5）過疎化の進行を食い止めるために観光客の誘致など、複数の試みを行なってきた京都府美山町かやぶきの里の視察とその現状に関する説明の聴講、6）かやぶきの里よりも山奥に位置し、林業以外の副業開発も困難だった福井県小浜市上根来地区の廃集落の視察、7）安藤教員による実践型集合意見形成法とそれに基づく各研修生の見聞内容のまとめ、合同報告会である（写真4）。

最後の7）は、安藤教員が地域住民らとの

長年の共働経験から考案した集合意見のとりまとめ法を講義し、かつ実際にそれを研修生に実践させたものである。これを除くと、フィールドスクールの内容・活動は、①本邦地方都市に導入されている環境管理、防災システムの視察、②地域の自然生態系の変化とそれへの地方自治体の対応の学習、③立地条件の差異などから過疎化問題の深刻度と対策の可能性を異にした2つの中山間地域内集落の視察と、大きくはこのような3つに整理できた。



### 研修生のレポートを読んだ報告者の所感

すでに冒頭で示唆したように本プログラムでは各研修生に対し、フィールドスクールを通して見聞・考察したことを、レポートとしてまとめることを義務づけた。ひとり当たりA4で2枚ほどの簡単なものだったが、それらは本学の当初の目的が実際に達せられたのかを判断しうる貴重な資料である。したがって、報告者はこのレポート全てに目を通した。厳密には報告者が見た初稿と、英文校閲や校正を経た掲載稿とは全く同じではないが、各レポートの内容自体は『創発』の掲載号でも確認できる。そこで、ここでは各稿の記載事項に関して個別に言及することはせず、報告者がレポートを読み、それらに対して抱いた全体的な所感について述べることにしたい。

レポート読了後の報告者の所感は、次のような3点に集約可能である。(i) ほぼ全ての研修生がゴミ処理センターや消防署などで見聞した自国にはない先進的な設備、処理・対処方法について感銘を抱き、それらの自国への導入の必要性について言及している。(ii) 研修生の多数が中山間地域内集落の実情とその過疎化問題について一定の理解を示しつつも、自国の現状とのギャップから(i)ほどには同種問題に対して強い関心を抱くには至っていない。(iii) レポートは当然ながら玉石混淆である。

ここでは特に報告者にとって良い意味で印象に残ったレポートについてもう少し言及すると、それらは社会人かその経験者、あるいは卓抜した英作文力の持ち主の作にみられ

た。たとえば、詳しくは『創発』の該当箇所に譲るが、ミャンマーから来た農業技術コンサルタントを兼ねる学生のレポートの記述に、他の一般学生にはない体験に根ざした説得力を、報告者自身は感じた。また、特にブータン人学生のレポートの一部に、ネイティブ並みの英語表現力をみてとれ、小学校から英語で授業が行なわれているという、その教育システムの片鱗を垣間見る思いであった。

### 研修生らの「不可解」な行動とプログラムの意義—むすびにかえて

フィールドスクール前半の守山市での植樹時、ブータンからの学生が頼まれてもいないのに近くの藪から竹を切り出し、それで苗木の廻りに柵を作り始めた。彼らとは地元守山の小学生や中高年の方も一緒に植樹作業にあっていたが、その柵作りが始まってから、特に小学生らは少しフリーズしたような状態になった。小学生たちはブータン人学生がなぜそんなことを始めたのか理解できず、そのふるまいを見ていた。そこで、それをやはり横で見ていた報告者が学生に何をしているのかを尋ね、その答えを通訳して伝えと、中高年の方は即座に笑い声をあげて反応したが、小学生たちは相変わらず彼らを見ていた。その時の学生の答えは、「ウシ除けの柵を作っている」というものだった。

報告者自身は都市部の非農家世帯の出身である。したがって、そもそもウシなど、家畜の飼育経験はない。また、仮に農家に生まれ育ったとしても、報告者の世代だと、「家畜から果樹を守るために柵を作る」と説明され

ても、守山の中高年の方のようにはいかず、おそらくすぐに反応できない者も多い。報告者の少年時代でさえ、各農家が家畜を飼う習慣は、すでに我が国の農村から消えつつあったからである。ただし、報告者はタイやカンボジアの農山村など、自らの調査地で同種の柵を何度も目にしているので、ブータン人学生の所作の意味をさほど時間を置かずに理解した。だが、その時は守山の小学生たちとは、また別の意味でフリーズ状態になった。辺りを少しでも見廻してみれば、ウシはもとより、もっと小型の家畜でさえその周辺には見当たらず、そのような柵など不要である。その程度の観察力や想像力さえ、彼らはもたないのかと、少し呆れたからである。

ただ同時に、その時はそう思ったが、いま本稿を書きながらこれまでの自らの現地フィールド体験などを振り返ってみれば、報告者自身はもっと粗忽なふるまい、たぶん現地の人たちにとっては「不可解」にも思えたはずの行為を、いくつも重ねてきた。たとえば、すでに20年前になるが、報告者は東北タイの社寺林利用・管理を研究テーマとし、ある森の寺に寝泊まりしながら数ヵ月間を過ごしたことがあった。「クティ」と呼ばれる、僧侶が使う森の中の小屋に止住するよう住職に指示され、そこで寝起きしつつ調査を始めたが、その数日後、小屋が樹々に覆われ日中でも暗いので、廻りの樹木を間引いて、小屋を明るくしてしまったことがあった。幸いなことに住職は温厚な方だったので、怒られるようなことはなかったが、その間引きの跡を見た彼の呆れ顔を、報告者はいまでも忘れない。

い。森の寺では僧侶が瞑想しやすいようにクティの廻りに、わざわざ樹木を密に生い茂らせ、光環境を瞑想向きに調整していたのに、報告者がそれを「きれいに」刈り込み、僧侶らの感覚からすれば、クティの環境を「改悪」してしまったからである。

この件はいまも報告者がよく記憶している例だが、ほかにも特に院生時代は同種の粗忽あるいは「不可解」なふるまいをいろいろと重ねていたはずである。ただし、これは自らの希望的な観測も含め、追記しておけば、同様の行為を犯す頻度は、おそらくフィールド体験を重ねるたびに減っていったのではないと思う。なぜなら、いまから思えば上述の住職の反応も一種の触媒だったように、フィールドで出会う人々のリアクションや表情などから、異なる文化や社会の中で自らの行為がどのように見えるか、自然と意識するようになり、自身の行為を少しだけ事前検閲するようになったからである。

話を振り出しに戻すと、上記のブータン人学生2人が本フィールドスクールの期間中に、植樹活動時のふるまいのズレを実際に自覚するようになっていたかは、定かではない。しかし、やはりこれも報告者の希望も込めて書けば、彼らも小学生たちや私のリアクションから「あれ、俺たちのやってること、何か変かな？」と、感じ取った可能性もあるのではないか。彼らが普通のコミュニケーション能力の持ち主なら、たぶんそんな風に感じたと、報告者自身は想像する。

報告者がたまたま目にしたのは、ブータン人学生2人の上述の行為だったが、ほかに

も何人かの研修生が形こそ違え、何らかの異文化・異社会体験を今回したのではない。仮にそうだとすると、ではそれに何の意義があるのかと問われても、「これこれこうだ」と、即答できるような意味づけを報告者自身、現時点ではできている訳ではない。だが一方で、おそらくひとついえそうなのは、普通の観光ツアーはもとより、短期留学でもできない体験を、今回のフィールドスクール

は彼/彼女らに提供できたのではない。そして、そのことを通して、異文化・異社会をみる視野なり、想像力なりを彼/彼女らに拡大させ得る機会を、本プログラムが確実に提供できたのではないかという点である。もし本当にそうだとしたら、今回のフィールドスクール・プログラムはうまくいったといえるのではないかと、自画自賛になるかもしれないが、報告者自身はそうに考えている。

---

## 「山下財宝」にとり憑かれる人々

師 田 史 子\*

### 「地図はないのか」

この質問を、幾度投げかけられたであろうか。調査地選定のためにフィリピン・ミンダナオ島の農村を訪問し、私が怪しい奴ではないと判断してもらえるほどに人々と打ち解けたところ、必ずと言ってよいほどにこの質問が誰からともなく放たれた。「ない。おじいちゃんに聞いてもおばあちゃんに聞いてもないって言っていた」と即答する。ない、とだけ返答すれば、矢継ぎ早に「日本に帰ったら家の中を探してみろ」「祖父・祖母に聞いてみろ」と返ってくることは火を見るよりも明らかであるので、会話の展開を先取りしてやりすごすことが、この類の話に嫌気がさして

いた私の癖になっていた。

人々が求めている地図とは、山下財宝のありかをしめす地図である。フィリピンでは「ヤマシタ・トレジャー」と呼ばれるこの財宝は、第二次世界大戦終戦時に山下奉文大將率いる日本軍によって埋められたとされる莫大な埋蔵金全般を指す。財宝なんて埋まっているわけがない、なぜこのような話を真に受けているのか。これが、山下財宝に対する私の第一印象であった。しかし、ミンダナオ島の村々では、外来者にとってははにわかに信じがたい財宝を、実に多くの人々が真剣に掘り当てようとしていた。なぜだろうか。

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

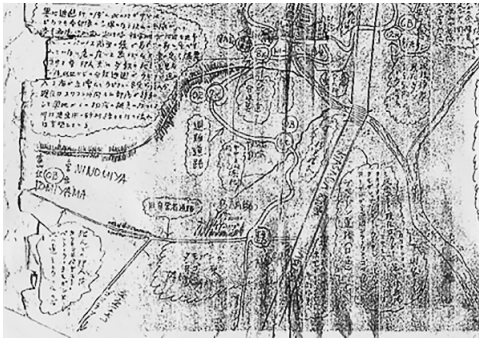


写真1 財宝の地図とされるもの

### フィリピンにおける財宝譚の数々

人々が山下財宝に熱狂する理由のひとつには、フィリピン国内における数多の財宝譚がある。特に、大戦末期に日本軍が退却した中央山地の中心都市バギオ市周辺は、財宝が多く存在する地として有名である。かつて日本軍が接収した住宅や、軍病院跡、退避壕跡など、日本軍駐留と結びついた場所で、金の延べ棒数本や宝石類が発見されたという噂は多数見聞されるが、発掘者が同定できることは稀であるという [梶原 1995: 22]。

20年間ものあいだ権力を掌握し、1986年のエドサ革命で失脚したフェルディナンド・マルコス元大統領は、財宝の発掘により富をなしたといわれる最たる人物である。1971年、錠前師であるロジャー・ロハス氏がバギオ市の山中で発掘した「ゴールデン・ブッダ」を、強制捜査部隊が強奪し、全くの別物にすり替えて返却した事件に、マルコスが関与していたという [笹倉 1998]。1992年には、マルコスの妻イメルダ・マルコスが、夫の選挙資金の一部は山下財宝に負っていたと認める発言をしたことで、財宝とマルコスとのつながり

に対する疑義は国民のあいだで一気に高まり、トレジャーハンティングは熱を帯びた。

### 日常的な宝探し

政府は2007年より、発掘時の事故防止や重要文化財の保護等を目的として、発掘作業者に対して環境天然資源省へ1万ペソの手数料の支払いを義務づけている。しかし、ミンダナオの農村においては、政府の許可を必要とするような、あるいは政府に目を付けられるような大規模かつ本格的な発掘作業ではなく、家の軒先の土地をスコップで掘ってみる、というような日常的な宝探しが試みられているといった方が正しい。宝探しは生業の片手間で行なわれることがほとんどである。

「ほら、あのヤシの葉で覆われたところを、地主が掘っているんだ。」ある日、ココヤシ農村を歩いていると、連れ立っていた男性がこう教えてくれた。道端には、ヤシの葉やブルーシートで四方が覆われた箇所がいくつかあった。発掘作業を隠蔽するためのこのような覆いは、かえって宝探し中であることを露骨に主張し、それが新たに他者を宝探しへと駆り立てるかのようであった。どれくらい深い穴なのか、のぞくことはできなかったが、発掘作業はもっぱら手作業だという。「あの地主はもう9ヵ所も掘っているけど、お宝はまだ出てきてないってよ」と呆れと期待が混じった口調で男性は続けた。

### 「宝の埋まる土地」

人々が財宝探しへ誘われる理由の2つ目には、宝探しを試みるに足るほどの、宝の存





写真 2 発掘作業中の穴

在を担保する十分な証拠を日常的に目撃することにある。

稲作農村に滞在していた時、30 歳半ばの主婦が、「山下財宝を持っているので確かめてくれ」と非常に内密な様子で話しかけてきた。家にお邪魔すると、壺や喫煙具などの土器を丁寧に取り出して来た。触ろうとすると、手を払いのけられるほどに丁寧に保管されていた。「家の下の川から出土したのよ。これはヤマシタ・トレジャーよね。あなた、詳しくないの？」と迫られたものの、土器に関して全くの無知である私は「日本に帰ったら、詳しい人に写真を見せてみる」と言って退散したが、真相は今も確認していない。

この主婦のように、実際に財宝らしきものを発見したことは、村における財宝の存在を証明する確かに大きな証拠となる。それと同程度に、急激に富を築いた者の存在や、外部からの「宝の埋まる土地」としてのラベリングも、人々の宝探しへの動機となっている。

たとえば、バイク運転手 2 人と酒を飲んでいたら、「トラックを買って雑貨屋で大儲けしている A さんは、どうやら財宝を当てた

らしいな」とどちらかが口火を切った。「ああ、ちがいない」ともうひとりが相槌をうち、「ダバオ市に出稼ぎに行っていた時、『君の村は裕福なのだろう、だってトレジャーのたくさんある地じゃないか！』って言われたよ」と興奮した口調で返答した。さらに自分自身も財宝を見つけたことがある、と切り出し、ブラックダイヤモンドであるらしい写真を披露した。

富を築いた者は、その背景に山下財宝の存在を噂される。一方、富を築いた者自身は、財宝の発掘を否定するか、あるいは財宝を怖いものとして語る。とある日、村の金持ちのひとりが、日本風のゴールデン・ドラゴンの像について語り出した。彼の父の兄弟が発見したが、ほどなくして亡くなったという。その像を受け継いだ者も急死した。「この地は日本兵に呪われているのだ」と金持ちは私を責め立てるように断言した。この後、話は戦時中に先住民がこの村で残虐な日本兵に食われた話へと続き、日本人代表として私は彼に謝罪するに至った。



写真 3 財宝であるとされる壺

## 宝を取り返しにやって来る「日本人」

山下財宝の話が頻繁に耳に入るのは、私が日本人であるからである、という側面は無視できない。日本人や外国人の訪村は、財宝を取り返しにやって来る日本人、奪取しに来る外国人として語られるとともに、村における宝の存在の信憑性はそれに比例して高まる。数年前にアメリカ人と日本人のプロテスタント系の宣教集団が訪村した際を回顧し、ある人は「布教は建前で、本当は埋まった財宝の有無を確かめに来たのだ」と疑い、また別の人は「数年後に日本人が戦争で死んだ先祖の元に来るといい。宝を取り返しに来る気だ」と語気を荒げた。

かれこれ10年以上、ミンダナオ島の生活支援活動をしている、とある日系NGOに關しても、表層では支援を礼賛するものの、陰では財宝発掘のための活動を疑う人々は少なくない。「あのNGO、支援活動は建て前で、実はこの場所に宝のありかが彫られた石を見つけたから、発掘に来ているんだ。この前、家の裏の土地を買い取って職員が交渉しに来たが、その目論見がわかってたから断ったぞ」という調子である。

外国人の訪問が稀である地域において、とりわけ日本人となれば、それは人々にとり、財宝に直結しかねない訪問なのである。

## おわりに

このように、さまざまな場面において、人々は財宝への想像力を駆り立てられ、実際に宝探しへと誘われている。財宝譚は国家レベルのものから村落レベルに至るまで多岐に渡って人々を刺激し、私のような日本人の突然の訪問は宝の存在をますます裏付ける。財宝は、「まだ一ない」希望として、人々の未来の可能性となる。

しかし、一攫千金を夢見る人々の財宝探しへの熱狂は、時に残酷な結末を残す。

調査を終え、日本に帰って来て間もなく、懇意にしていた村の女性からメッセージが届いた。「あの男の子、ヤマシタ・トレジャーをお父さんと探しに行ってた時に、崖からの落石で亡くなったよ。」彼は自分の村に財宝が眠っていることを信じてやまない、まだ18才の青年であった。私の調査にも親切に協力してくれる、近しい存在のひとりであった。

山下財宝の存在は、亡霊のように、人々にとり憑いて離れない。そして今、私にも。

## 引用文献

- 笹倉 明. 1998. 『最後の真実―「山下財宝」その闇の奥へ』 KSS 出版.  
梶原景昭. 1995. 『「山下財宝」の行方』 『年報人間科学』 16: 21-37.

## The Social Impact of the Ebola Epidemic on Local Communities in Guinea

Mamadou Sadio DIALLO\*

### 1. Introduction

Guinea was one of the countries worst affected by the 2014-2016 Ebola outbreak in West Africa. In the course of this research, I visited several villages to achieve a better appreciation of the Ebola epidemic's social impact on the rural communities in Guinea. To illustrate the situation as it is on the ground, I will focus mainly on Meliandou (known to have been the first village to be affected by the Ebola epidemic during the outbreak in West Africa) (See Fig. 1).

My motivation in conducting this research stemmed from the extraordinary West African Ebola outbreak in 2014-2016, which, in my

opinion, revealed the extent to which the world underestimated the potency of this virus. The Ebola epidemic in Africa has significantly challenged modern medicine despite recent remarkable achievements and revolutions in the field [Garrett 1995: 100-152].

According to the WHO [World Health Organization 2016], the seriousness of the outbreak was attributable to not only to the spread of the disease across ten countries worldwide, including Guinea, Sierra Leone, and Liberia among those hardest hit, but also because of the many suspected and probable cases—estimated at over 28,000—during the outbreak, against the 15,000 people confirmed to have been infected with Ebola, mainly in West Africa, as well as the cumulative fatalities exceeding 11,000 people.



Fig. 1. Map of Guinea

Conakry: Capital city (in the West)

Meliandou: Research site (South-eastern Guinea)

### 2. Research Site and Methods

According to a villager, Meliandou was founded by a well-known bush meat hunter named Meli, who lived in the neighboring village of Nyayedou. This place was the

---

\* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University



Photo 1. Meliandou Village

Photograph taken by the author, March, 2017.

village founder's hunting ground and from time to time he would rest, having descended from the mountains to where the village now stands. It is located at the foot of two small mountains situated to the east and west sides of the village. Thanks to the abundance of mountains for his hunting activity and the locale's suitability, he decided to settle down as a pioneer and the village took his name (the literal meaning of the word Meliandou is "the land of Meli") (See Photo 1).

The present data were obtained from ongoing field research for my master's thesis, and this research has been conducted over four months, in two tranches, respectively, from early July to late August 2017 and from February 2 to March 29, 2018.

My research entails community observation through careful participation in the routine lives of these communities; I also conducted some structured and semi-structured interviews, focused group discussions, and accessed records—i.e., archives, as well as case studies.

### 3. The Outbreak of the Ebola Disease in Meliandou

The beginning of what would become one of the greatest public health crises of this century, requiring an enormous international response, was an eruption in the small village of Meliandou. Initially, the death of Emile Ouamouno, who would later be confirmed as the first Ebola victim of the (2014-2016 West African) epidemic, was by no means indicative of the beginning of an outbreak of the infectious disease in the village.

In fact, according to the villagers, deaths began to occur in the village two to three weeks after the consumption of a colony of fruit bats discovered by two little boys who happened to be walking near the village. Word of the discovery of the fruit bats' nest in the hole of a hollow tree (Lola is the local name) quickly spread among the villagers. Thereupon, those who went to confirm the presence of the fruit bat colony were astonished at the number of bats present. To eliminate as many as possible, they decided to trap the bats by lighting a fire in the tree's hole to smoke them out. However, according to a field survey, several villagers were either exposed to, or directly consumed, the fruit bats, which were probably infected.

Recollection of the death of Emile (a 1-year-old boy) on December 25, 2013, reminds Meliandou's villagers of the starting point of the successive deaths of twenty-four



people in the community, almost all of them dying of diarrhea, vomiting and fever symptoms. Eleven days after Emile's death, his sister, older by four years, who was possibly infected by her younger brother, also passed away after exhibiting the same symptoms as Emile's.

On January 11, 2014, their mother, who was pregnant, passed away during the delivery and, according to some people in the village, most of the women who assisted her in this process were also infected and subsequently died. Later, Emile's grandmother succumbed to the disease on January 16, 2014.

Over an interval of three weeks, five family members, including the baby, died one after the other; such a run of deaths were a new phenomenon for the villagers. Later that month, on January 26, 2014, two further people died on the same day having suffered similar symptoms to those of the village's recent fatalities, and their deaths raised the month's death toll to seven.

Thereafter, these rapid and, heretofore, very rare fatalities not only aroused a state of fear amongst the community but also concern as to what might have caused this rapid succession of deaths in the village.

The death of the village's ninth victim on January 29 that year upset a great number of people and resulted in panic among the village's inhabitants. He became infected by the virus immediately upon returning to

Meliandou and passed away some days later. His death generated public concern over the predominance of deaths among young people, who were pressing for measures to be taken.

The present descriptions of the beginning of the 2014-2016 Ebola outbreak in the village of Meliandou may complement some existing literature while contrasting with certain examples of previous literature.

#### **4. Socio-cultural and Religious Practices and the Spread of the Ebola Virus**

At the beginning of the Ebola outbreak in the village, regardless of the actual causes of the successive fatalities, villagers proceeded with their customary practices in mourning and honoring the deceased through burial. Most people contracted the disease through direct exposure to the virus whilst unknowingly caring for an Ebola-infected patient in the family, visiting a sick person in the community, or while attending funeral ceremonies following a fatal case in the village.

A funeral ceremony in Meliandou consists mainly of three parts: a deathwatch, the exposure of the corpse, and a burial. These activities must be carried out for most deaths, especially when the deceased is an adult.

##### ***Deathwatch***

Deathwatch takes place just after someone passes away in the village, if the person dies at home, which happens in most cases. The

corpse will remain in the last resting place. The neighborhood, elders, and closest family members will be informed about the death. Together, the community and the close relatives will decide on which procedures to follow for the funeral ceremonies.

Meanwhile, villagers visiting the deceased's room cry and scream to acknowledge the loss of an important member of the community. To mourn the death, other people hug and kiss the hands or forehead of the deceased. In this village, a death watch entails keeping vigil around the deceased's home late into the night, while the bereaved family ensures that food and alcoholic drinks are provided to visitors.

#### *Exposure of the body*

The second stage of the funeral ceremony involves displaying the corpse of the deceased in a more public or religious setting to allow family and friends to pay final tributes. This is an important step as it allows people from distant places to see the deceased for a final time before burial. This step includes almost all religious requirements, such as prayers, blessings, and invocations for divine help and guidance for the dead.

#### *Inhumation*

This involves placing the deceased in the earth and is the final step in the funeral process for the dead in the village of Meliandou. A

burial is performed according to religious and traditional rites; these practices are considered very important for the deceased. They are believed to rescue the deceased in the course of the mandatory migration from the world after life. According to the villagers, religious and social-cultural practices are decisive factors in transitioning successfully from one environment to another.

### **5. Consequences of the Ebola Outbreak in Meliandou**

The impact of the Ebola outbreak on the local population in the village of Meliandou was clear at first glance and could easily be observed in the daily lives of the villagers. After losing twenty-four members of the community in the 2014-2016 Ebola epidemic, the villagers are now more than ever in a profound state of shock.

#### *At the communal level:*

On the one hand, in addition to the multiple fatalities, the social stigma suffered by the village during and after the outbreak has rendered the community poorer than ever before. The quarantine imposed on the local village to control the outbreak prevented villagers from carrying out necessary subsistence farming and most people, especially those directly impacted in the community, were unable to avoid food scarcity (See Photo 2).

According to the villagers, they were unable



Photo 2. Inhabitants of Meliandou  
Photograph taken by the author, August, 2016.

to work during the two-year-long outbreak, and this had serious repercussions on the process of returning to life's routines after Ebola. On the other hand, the Ebola epidemic created another category of dependent people, widows in particular, who faced not only the challenges of their children's education but also nutrition and health issues. The effects of the outbreak in the village of Meliandou is still discernible in the day to day activities of the villagers, as they try to compensate for the collateral damage wrought by the disease, while most people find it difficult to make ends meet.

#### *At the individual level:*

The victims of the Ebola virus in the village of Meliandou have left behind fifty-seven orphans, half of them very young. Some of these children suffer from a lack of paternal or maternal care and have been taken in by members of their extended families for special attention, care and support for their educa-

tion. In rural areas, children without parents are vulnerable to stigma in some cases.

Another important issue at this level is the trauma suffered by some of those who lost one or both of their parents during the Ebola outbreak. There are numerous people who have not recovered from the great emotional shock and stressful experience of the Ebola outbreak, a distress that has resulted in severe psychological injury for them.

## 6. Conclusion

It is important to remember that humans are infected with the Ebola virus either by fruit bats or bush animals. Ebola viruses require two transmission processes for outbreaks to erupt. First, there must be a spillover event, which is defined as a zoonotic transmission from either the primary sylvan reservoir host (e.g., fruit bats) or from a secondary sylvan host, for whom the virus is also pathogenic (e.g., non-human primates) [Walsh and Haseeb 2015].

However, as this document and several other documents revealed, with regard to the spread of the Ebola virus, the human-to-human infection rate was faster and more frequent. The 2014-2016 epidemic illustrated how longstanding customary and religious practices could become an obstacle to containing an epidemic such as the Ebola virus. "Human epidemics subsequently take off by direct human-to-human contact via bodily

fluids or indirect contact with contaminated surfaces,” and, “unsafe burials that involve direct contact with Ebola-infected bodies also pose a major infection risk.” [Chowell and Nishiura 2014: 2]

Indeed, the spread of Ebola in West Africa cannot be dissociated from socio-cultural practices such as caring for or visiting the sick, the use of traditional medicine, mourning rites, as well as religious practices, such as cleaning dead bodies and unsafe burials, and so on.

Moreover, as mentioned throughout this essay, while the Ebola virus has been defeated in the country, the direct consequences, which vary from one place to another, are still visible in the day-to-day lives of the rural communities that were worst affected, where people, especially those who lost their

parent(s), are trying to cope with the realities of the aftermath on the ground.

## References

- Chowell, Gerado and Hiroshi Nishiura. 2014. Transmission Dynamic and Control of Ebola Virus Disease (EVD): a review, *BMC Medicine* 12: 196.
- Garrett, Laurie. 1995. *The Coming Plague: Newly Emerging Disease in a World Out of Balance*. New York: Penguin Books.
- Walsh, Michael G. and M. A. Haseeb. 2015. The Landscape Configuration of Zoonotic Transmission of Ebola Virus Disease in West and Central Africa: Interaction between population density and vegetation cover, *PeerJ* 3: e735.
- World Health Organization. 2016. The number of cases and deaths as reported in WHO situation reports for Guinea, Liberia, and Sierra Leone during the West Africa Ebola outbreak. (<https://www.cdc.gov/vhf/ebola/history/2014-2016-outbreak/case-counts.html>) (July 15, 2018)

---

## ウガンダ・ニャムリロ湿地における農地利用と生態系の保全

堀 光 順 \*

ウガンダの国土の11%にあたる26,315 km<sup>2</sup>は湿地である。ウガンダには、ラムサール条約で保護されている湿地が12ヵ所ある。このような湿地では、日本でも最近注目を集め

ているハシビロコウやカンムリヅルなどを観察するためのボートサファリがあり、観光客に人気のアクティビティとなっている。

一方、同国では人口が急速に増加し、2002

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



年から 2014 年の間でも 2,400 万人から 3,400 万人へと、年率 3.0% と高い人口増加率が記録されている [UBOS 2016]。急速な人口増加は農地の拡大を進め、これまで利用されなかった湿地も開墾されるようになった。ウガンダ政府は 1995 年の環境法 (the Environment Act) によって湿地保全の政策を進めてきた。しかし、1997 年と比較すると 2008 年における湿地の面積は約 30%, 10,000 km<sup>2</sup> 以上が消失している [Government of Uganda 2016]。本稿では、1980 年代から農地利用が進められてきたウガンダ南西部のニャムリロ湿地 (Nyamuriro swamp) を事例に、地域住民による農地開墾の歴史と湿地の生態系との関係を紹介したい。

#### ニャムリロ湿地

ウガンダ共和国の首都・カンパラから南西へ約 350 km, ルワンダ共和国との国境近くに位置するカバレ県には、標高 2,000 m 前後の高原地帯が広がっている。この地域に居住する農耕民チガ (Kiga) の人びとは、山地斜面に等高線に沿うかたちでのり面<sup>1)</sup>をつくり耕作地を造成している。調査村に隣接するニャムリロ湿地は、ブニョニ湖を水源とするルフマ川を取り囲む 5,100 ha の広大な湿地である (写真 1)。この湿地は、従来から政府が所有権をもつ土地である。1970 年



写真 1 ニャムリロ湿地の南端部と集水域となる丘陵地

丘陵地の斜面は耕地化され、サツマイモやインゲンマメ、ソルガムが栽培されている。

代までチガの人びとは、湿地を農地として利用することはなく、辺りはカヤツリグサ科のカミガヤツリ (*Cyperus papyrus*)<sup>2)</sup> が一面に繁茂した湿地であった。

現在この湿地は、政府の許可を得た複数のグループによって、農地として利用されている。調査村の北側に隣接する村に居住する 75 歳の男性は、この地域で一番早く湿地を開墾する許可を得たグループの構成員である。彼らは同じ郡内の人びととニャルランビ農業組合 (Nyarurambi Growers) というグループを 1978 年に設立した。このグループのメンバーは 30 人で、ニャルランビ郡に居住する住民のみが加入できる。1979 年に湿地の農地利用のための許可をニャルランビ郡の郡庁とカバレ県の県庁、そしてカンパラにある環境省 (Ministry of Water, Lands and

1) 人びとは斜面に対して水平方向に、高さ 1~2 m の垂直なおり面を造成する。のり面は土地の境界になっていることが多い。そのため、人びとはのり面を「境界」の意味をもつ「orubibi」と呼ぶ。

2) 地域の人びとは、このカミガヤツリをバスケットやござの材料として利用してきた。現在では、湿地全体を耕地化しているためルフマ川沿いや湧水地といった限られた場所で観察できる。

Environment) に申請し、許可書を取得した。

申請の際に手数料を支払ったが、微々たる金額で高額ではなかった。翌年7月に環境省の役人が視察と測量の作業をおこない、グループに加入したメンバーは湿地の開墾をはじめた。当時、メンバーの全員が湿地の農地を共同で開墾し、換金用のインゲンマメやエンドウマメを栽培していた。メンバーは湿地の開墾から農作物の収穫まで協力して作業し、収穫物の売上金を均等に分配していた。雨季には湿地を取り囲む丘陵から雨水が流れ込み、耕作地が水没する。そのため、メンバーは雨が少ない乾季の3ヵ月間のみ農地を利用した。

1990年からメンバーは1人につき、20,000 シリング（当時のレートで約5,000円に相当）をグループに支払うようになった。支払われた会費の用途は、政府に支払う1年間の湿地利用の代金<sup>3)</sup>と、収穫した作物を貯蔵する倉庫の建設費用や農薬の購入費用などに充当された。グループのメンバーは、農地を利用する乾季に週に2回集まり、湿地の耕作地にて共同作業をおこなっていた。この共同作業に参加できない場合、欠席者は1回の作業につき5,000 シリングをグループに支払わなければならないかった。

2012年からこのグループでは湿地の共同利用に代わり、各メンバーに対して均等に土地を分配し、個人で土地を利用できる仕組みが導入された。その結果、各メンバーは、自らが生産する作物種の決定や生産計画を策定

し、さらには割り当てられた農地の賃貸もできるようになった。こうして各メンバーは、いわば個人所有地と同じように湿地を利用できるようになったが、雇用労働者の賃金や農薬の購入費用など農作業にともなう支出を自らが負担する必要に迫られた。

### 現金を生み出す土地—ジャガイモ栽培と賃金労働

ニャムリロ湿地では1979年からグループが単位となって湿地を開墾し、インゲンマメやエンドウマメなど換金作物を湿地で栽培してきた。1984年から、人びとはジャガイモを生産し、首都カンパラにむけて出荷するようになった。これまで栽培してきたインゲンマメやエンドウマメよりも、ジャガイモの栽培は多くの現金収入をもたらしたためである。以下、ジャガイモ栽培の作業をみていこう。

耕作地の耕起作業では、まず繁茂した雑草を刈り取る。その後、水路とする区画を掘り返し、その土を刈り取った雑草の上に高さ1mほど積み上げる（写真2）。人びとは、この畝をつくることで、過湿による生育障害を防いでいる。湿地の土壌は、肥沃度が高いと認識される。人びとは湿地の耕作地をオルフジョ（*orufujo*）と呼ぶ。

ウガンダ南西部では3月から5月、9月から11月と、1年に2回の雨季がある。第2雨季は9月に到来するが、毎年雨季のはじまる時期にはばらつきがある。第2雨季の

3) 政府に支払う湿地の利用代金は、許可をもつグループ単位で支払われる。この代金は、1990年時点で500,000 シリングであり、2017年現在では1年間3,000,000 シリングと上昇している。



写真2 湿地の中央部を流れるルフマ川とジャガイモ畑となった湿地

人びとは幅 2 m、長さ 20 m、高さ 1 m ほどのマウンドを造成して、ジャガイモを栽培している。

到来が例年よりも早いと、湿地の水位が上昇し、栽培しているジャガイモに生育障害が発生する。このような生育障害を回避するため、種イモを一度にまとめて植え付けず、植え付け時期を 6 月下旬から 7 月にかけて 1～2 週間ほどずらして、複数回にわけることが多い（写真 3）。ジャガイモの栽培期間は 2～3 か月ほどであるため、8 月下旬から 9 月上旬に収穫される。

収穫されたジャガイモは袋に詰めて、倉庫まで運搬される。倉庫では、ジャガイモがサイズごとに選別されたのち、袋に詰められる。1 個の重さが約 80 g 以上の大きいサイズのジャガイモは食用として仲買人に出荷される。<sup>4)</sup> 小さいサイズのジャガイモ（直径 5 cm、約 50 g 以下）は保管され、種イモとして植え付けに利用されるか、売却される。出荷用のジャガイモを詰めた袋は高さ 1.2 m 周囲 1.4 m、約 140 kg の重さにもなる（写



写真3 ジャガイモの植え付け作業

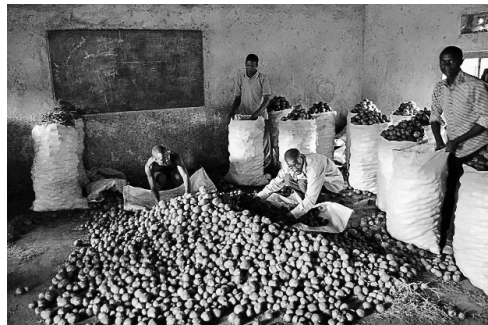


写真4 ジャガイモの袋詰め作業

収穫したジャガイモは、グループが所有する幹線道路沿いの倉庫まで運搬される。運搬されたジャガイモはサイズごとに選定された後、袋に詰められる。

真 4)。

湿地におけるジャガイモ栽培の特徴として、農業労働に占める賃金労働者の割合が高いことがあげられる。とくに、収穫作業と収穫物の運搬には多くの賃金労働者が雇われている。男性たちはぬかるんだ泥に足をとられながら、重いジャガイモを背負って運搬作業に従事している。この作業は、きわめて重労働である。耕作地から倉庫まで 1 km ほどの距離、ジャガイモ 1 袋（100 kg）を運搬

4) 2016 年 2 月時点のジャガイモ 1 袋（約 140 kg）の売却価格は 70,000 シリングであったが、2017 年 2 月時点では 80,000～85,000 シリングと価格が上昇した。主な要因としては、種イモ価格の上昇があげられる。

する対価は2017年2月では8,000 シリング（約 300 円に相当）であった。しかし、重労働ではあるが、賃金と就業機会が高いため、周辺住民に限らず、隣県のキソロ県や隣国ルワンダからも出稼ぎ労働者が流入している。

### おわりに—食糧生産と生態系の保全

このようにチガの人びとは1970年代後半からグループ単位で湿地を開墾し、農地の拡大に努めてきた。湿地の開墾は、人口増加にともなう土地不足という問題へのひとつの対策でもあった。今では、カバレ県のジャガイモの生産量はウガンダ国内でもっとも多く、国内の約30%が産出されている [UBOS 2010]。

しかし、湿地の開墾は生態系の保全をめぐって新たな問題や軋轢をうみだしてもいる。鳥類の保護を目的とする国際環境 NGO であるバードライフ・インターナショナルによって、ニャムリロ湿地は重要野鳥生息地 (Important Bird Area) に指定されている。ウガンダの国鳥であるホオジロカンムリヅル (*Balearica regulorum*) (写真5) や国際自然保護連合のレッドリストで近危急種に指定されているアカハラセグロヤブモズ (*Laniarius mufumbiri*) など多くの貴重な鳥類が生息しているからである。農地の拡大による環境の改変のみならず、農薬の利用による汚染など生態系への影響も懸念されている [Ssegawa *et al.* 2004; Arinaitwe 2010]。人口増加がいまも進むウガンダで、農地の拡大と生態系の保全、絶滅危惧種の鳥類の保護という、相反する問題を解決するため、どのような妥協点



写真5 ジャガイモ畑に飛来したカンムリヅルの群れ

があり、いかに対処していくのか、今後の調査で考えていきたい。

### 引用文献

- Arinaitwe, J. 2010. *Important Bird Areas in Uganda-Status and Trends 2009*. Kampala: Nature Uganda.
- Government of Uganda. 2016. WETLANDS ATLAS Volume Two Popular version. <[http://www.mwe.go.ug/sites/default/files/library/Uganda%20Wetlands%20Atlas%20Volume%20II\\_Popular%20Version.pdf](http://www.mwe.go.ug/sites/default/files/library/Uganda%20Wetlands%20Atlas%20Volume%20II_Popular%20Version.pdf)> (2018年7月25日)
- Ssegawa, P., E. Kakudidi, M. Muasya and J. Kalema. 2004. Diversity and Distribution of Sedges on Multivariate Environmental Gradients. *African Journal of Ecology* 42(1): 21-33.
- UBOS (Uganda Bureau of Statistics) 2010. UGANDA CENSUS OF AGRICULTURE 2008/2009-Summary Report. <[https://www.ubos.org/wp-content/uploads/publications/03\\_2018UCASummary.pdf](https://www.ubos.org/wp-content/uploads/publications/03_2018UCASummary.pdf)> (2018年7月25日)
- . 2016. National Population and Housing Census 2014 Main Report. <[https://www.ubos.org/wp-content/uploads/publications/03\\_20182014\\_National\\_Census\\_Main\\_Report.pdf](https://www.ubos.org/wp-content/uploads/publications/03_20182014_National_Census_Main_Report.pdf)> (2018年7月25日)



## Diplomatic Practices in Nepal-Japan Relations: A Comparative Study Based on Regime Change

Sharmila THAPA\*

### Introduction

Long before diplomatic relations were established between Japan and Nepal, the people of these two countries established connections and friendship a century ago when the Zen Buddhist scholar Ekai Kawaguchi arrived in Nepal on 26 January 1899, and stayed for two and a half years to study the sacred place Lumbini where Lord Buddha was born and to collect Buddhist manuscripts. After his visit, eight Nepalese students visited Japan in 1902 for the first time to study agriculture, mining, papermaking, and mechanical engineering. Since their return to Nepal, there was a long period of time during which Nepali students did not travel to Japan, but this practice was revived in 1958 with the Japanese government's MEXT (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) Scholarship [Barua 2002]. Dr Eizaburo Nishibori, who received an audience with King Mahendra in 1952, visited Nepal in order to receive permission for a Japanese expedition team to climb Mt. Manaslu. During the coronation of the late HM King

Mahendra on 28 July 1966, Ambassador Seijiro Yoshizawa attended on behalf of the government, and that served to spark the late King Mahendra's strong desire to establish diplomatic relations with Japan. As a result, diplomatic relations were finally established on 1 September 1956. Their Excellencies, Mr Seijiro Yoshizawa and Mr Daman Shumsher Rana became the first ambassadors of their respective countries [Embassy of Japan 2003].

Nepalese diaspora in Japan has been rapidly increasing in recent years, and I find this trend inspiring. Likewise, Mr Mahendra Bahadur Pandey, who was an academic before entering politics and was Foreign Minister of Nepal in 2014, said, "Japanese, too claim that Nepalese pressure in Japan is significantly increasing. They said that Nepali citizens are coming with a student's visa, and later on, they open a restaurant and stay longer." In the context of Nepal-Japan relations, public diplomacy is little different. Most Nepalese go to Japan as labourers, while people from Japan are mostly experts and researchers (personal communication, March 4, 2018).

---

\* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

To date, very little research has been conducted on Nepal-Japan relations. In most of the literature, the researchers, as well as academics, argue that maintaining mutual trust and confidence with India and China has so far become the top priority of Nepal's foreign policy. Therefore, most of the government of Nepal leans only towards these two countries. Thus, as a researcher, I cannot disregard Nepal's geopolitical realities, but I still feel the need to address some questions through this research. Is Nepal's foreign policy truly neighbour-centric? If not, since Nepal has already established bilateral and multilateral relations with many countries, why has it not moved towards improving or establishing good relations with distant countries such as Japan, South East Asian countries, or Middle Eastern countries? Nepal's foreign policy seems underdeveloped in terms of dealing with countries beyond its immediate region.

### The Rationale of Fieldwork

I am frequently asked why I have chosen to study Nepal-Japan relations. Even though the question seems quite simple, it is difficult to answer. Although I constantly rethink my proposed research topic, I hope to be able to provide a reliable and accurate answer to this question by the time I complete my PhD dissertation.

I went to Nepal a few months ago (2 February to 19 March 2018) to conduct research

in Nepal-Japan relations from the perspective of diplomatic practices. As per my plan, I conducted in-depth interviews with nine key individuals. Among them, there were diplomats, former foreign ministers, journalists, professionals, and academics. For these interviews, I developed a set of questionnaires based on diplomatic qualities, such as former diplomacy, current diplomacy, and public/citizen diplomacy to acquire knowledge on which type and in what ways diplomatic practices would be conducted between the developed and developing countries.

Before I left Japan, I thought I would be able to directly and easily access sources once I reached Nepal, but I found that it was a tough task because most of the old files and records, written documents, and even libraries—all the sources that a researcher



Photo 1. Central Library, Tribhuvan University

relies upon—had been scattered or stolen mainly due to the collapse of the building during the earthquake and technological insufficiency materials could not find in proper order in the library and national archives. In fact, very few records or literature were available. When I entered the central library at Tribhuvan University, the great earthquake of 2015 had done me and other researchers a great disservice, but luckily I found one bookshelf containing books related to Japan. Additionally, the Ministry of Finance, Ministry of Foreign Affairs, the Japanese Embassy, and JICA-Nepal helped me acquire the data and related published materials that I needed.

I want to explore Nepalese activities in Japan. In 1987, it was reported that there were 248 Nepali citizens in Japan, whereas in 2016, there were 67,470 Nepali citizens, the sixth largest migrant group after Chinese, Korean, Filipino, Vietnamese, and Brazilian groups. Also, large numbers of Nepali students choose Japan as their destination for further study. Masako Tanaka, from Sophia University, Tokyo who is conducting research on Nepali migrants, argued that the increasing number of Nepalese in Japan is creating a so-called, “parallel society” that is isolated from and/or has difficulty integrating with the host community [Tanaka 2018]. Similarly,

the foreign student advisor at the Japanese Embassy in Kathmandu, Mr Harendra B. Barua, said that there are currently around 80 thousand Nepali citizens in Japan, and stated, “It would have been impossible to predict how many of them return home with skill and knowledge of Japanese culture and modernization. We can also now see ‘*Nekon-Jasai*’<sup>1)</sup> in Nepal” (personal communication, February 23, 2018). Japan has been a good friend to Nepal for a century, and its cooperation with Nepal is meaningful, which is being given and received without any political entanglement. But, since the mysterious royal massacre in 2001 and major political changes in Nepal, the government and the role of politicians and the diplomats’ involvement in Japan-Nepal relations have been deteriorating. This has served to increase my interest in conducting research in Nepal-Japan relations. This study has been done, taking three eras of diplomatic practices of Nepal, which are as follows; Panchayat era (1960-90), Constitutional Monarchical era (1990-2006) and Republican era (2006 onward).

#### **Diplomatic Practices in the Panchayat Regime (1960-1990)**

From the 1960s until around 1990, direct leadership was provided by an absolute

---

1) *Nekon-Jasai* means “Nepalese Spirit-Japanese skill and knowledge.” This is a variation on ‘*Wakon-Yosai*,’ which means “Western technology or knowledge with Japanese spirit” and describes how Japan introduced Western technology and knowledge in the Meiji era for the industrialization and economic development of Japan.



Photo 2. Interviewing the Former Minister for Foreign Affairs of Nepal, Mr Mahendra Bahadur Pandey



Photo 3. With the foreign student advisor Mr Harendra B. Barua at the Japanese Embassy in Kathmandu

monarchy in Nepal, in which sovereignty was exercised by the King alone and which used to be understood mainly in three perspectives: the politics of a guided democracy, a party-less system, and an authoritarian system. The regime was based on the principle of “development first” and “democracy later” [Pradhan 2015: 14-15]. Former Minister Pandey said, “Diplomacy is a continuous process. It’s not true that when a regime changes it starts from zero; the regime’s nature will structure it. To satisfy their national interests and gain support in an international arena, democratic countries support every regime,

whether it be autocratic or democratic; a ruler has their own interest, how to extend their regime, so they are always thinking about how to balance external power” (personal communication, March 9, 2018).

Similarly, during the Panchayat Regime, King Mahendra and King Birendra had given top priority to Nepal’s relations with Japan. Ram Kumar Dahal, a professor of political science at Tribhuvan University, said that Nepal and Japan relations were/are cordial, founded on mutual trust and respect, and involved friendly bonded countries. The exchange of state visits by the members of the royal families made relations stronger during those days (personal communication, March 11, 2018).

In this regard, then King Mahendra and Queen Ratna made their first state visit to Japan in 1960 and then again in 1970 to attend Osaka Expo ‘70. Likewise, the present Emperor and Empress Akihito and Michiko visited Nepal in 1960 and again in 1975 to attend the coronation ceremony of King Birendra. During the first visit, both the Emperor and the King received the highest commendation from each of the countries: the “Grand Order of the Chrysanthemum of the Moon” (Japan) and the “Most Glorious Order of the Ojaswi Rayanja” (Nepal)<sup>2)</sup>. King Birendra was so inspired by the Japanese education system that he chose to study at Tokyo University in 1967. Bam Dev Sigdel,

an economist who studies the Japanese economy, said that Nepal had supported Japan in matters of trade, investment, and the peace process in 1960, 1970, and 1980, e.g. the Lebanon crisis, the Korean War, and the Arab-Egypt-Israel War (personal communication, February 27, 2018). In the same way, Japan also fully supported Nepal's proposal (made by King Birendra) to declare Nepal as "a Zone of Peace" in 1975 [Sharma 2010: 189-191]. Along with the royal visits, many officials, such as ministers and parliamentarians, made visits during the 1960s and 1990s.

#### Diplomatic Practices between Nepal-Japan in from 1990 to 2006

Since the restoration of the multiparty democratic system with the constitutional monarchy in 1990, Nepal's relations with Japan have been made or directed by the elected head of the government, unlike when they were made directly by the King, such as before 1990. In this regard, Prof Dahal said that when Nepal started practising democracy post-1990, new actors such as the private sector and civil societies of both countries became the stakeholders in foreign policy instead of the state alone. Moreover, Khadga Khatri Chhetri (KC), who is not only an expert on foreign policy and diplomacy

but is also known as a Nepal-Japan expert in Nepal, said that Nepal and Japan had enjoyed the best diplomatic practices from 1980 to 2006. This was largely possible due to the identical political structures (monarchy) and their styles and interests in both countries. Due to the similarity of their political regimes, the economic boom in Japan, and the positive popular perception of both countries, the bilateral relations between Nepal and Japan were at their peak during those days (personal communication, March 9, 2018).

The first non-royal high-level visit from Japan to Nepal during this period was in 2000 by then Prime Minister Yoshiro Mori. He expressed his desire to continue Japan's support in socio-economic development.



Photo 4. A Postal Stamp of Rev. Ekai Kawaguchi

2) "Ojaswi rajanya" was an order of knighthood of Nepal. In English the term 'ojaswi' means bright or brave and 'rajanya' means kinsmen of the *rajan* (king).



In 2002, former PM Ryutaro Hashimoto visited Nepal and was the first such official to stay in the heart of Nepal, overseeing various developmental projects in different sectors: health, education, sports, tourism, and children's health. A postal stamp of Rev. Ekai Kawaguchi was also released in 2002. During this period, a very few bilateral high-level visits were hosted by both countries. In contrast, the personal attachment and engagement between the two royal families have gradually deteriorated since the abolishment of the monarchy in Nepal in 2006. The attraction toward Nepalese royalty in Japan has significantly waned after the royal massacre in 2001, where almost all prominent royals were massacred; however, then Crown Prince Paras and his spouse visited Japan even after Gyandendra became the King of Nepal. Despite this, during the period from 1990 to 2006, there was only one high-level government visit: then Prime Minister Girija Prasad Koirala's visit to Japan in 1998.

#### **Diplomatic Practices between Nepal and Japan after 2006**

There has not been a significant paradigm shift in Nepal-Japan diplomatic relations even after the abolishment of the 239-year-old monarchy in 2008. Psychologically, the Japanese government and its citizens might have opined that there would be a political vacuum after the abolishment of the monarchy in

Nepal. However, unlike during the Maoist Insurgency (1996-2006) and the Royal coup (2005-2006), bilateral relations between Nepal and Japan gradually resumed normality, as Japan supported the peace-making and peacebuilding processes of Nepal through the UNMIN (United Nations Mission in Nepal), election support, and resumption of foreign aid, which was discontinued in 2002. (KC, personal communication, March 9, 2018).

Madan Kumar Bhattacharai, a former HE Ambassador of Nepal to Japan (2011-15), also said that diplomatic practices between Nepal and Japan remain effective all the time. During Panchayat and post-panchayat, along with the people, the relations between two royal families provided a strong base to strengthen bilateral relation. However, after the end of monarchy people to people relation through cultural exchange and sport exchange has become the tool of bilateral relations. He said, "though diplomats were selected from elites or their relatives they were educated and qualified. And one thing is that they were very serious in selecting ambassadors/diplomats for Japan. But in recent days, the trend has changed; non-diplomats are made diplomats and sent." He also shared his experience when he was here as an ambassador and expressed a vote of thanks to the Japanese mountaineering team members, such as Junko Tabei, Yuichiro Miura, and other ordinary citizens who have not only expressed

their feelings but also helped by collecting the largest amount of money to provide to the victims of the earthquake in Nepal (personal communication, March 6, 2018). The same kind of sympathy was shown by Nepali citizens when they provided five thousand blankets and food to the Japanese people who were victimized by the earthquake and subsequent tsunami on 11 March 2011 [Bagale 2011]. According to Jun Sakuma, a chief representative of JICA Nepal, during and after the great earthquake that struck Nepal on 25 April 2015, they had extended assistance towards reconstruction and rehabilitation with a “Build Back Better” concept to support the earthquake victims. Not only this, but the JICA has also been granted loan assistance for a project to construct ‘Nagdhunga Tunnel,’ which will be the first tunnel in Nepal (personal communication, March 7, 2018).

### Observations

After preliminary fieldwork, I learned how to dig deeper to extract authentic answers to my research questions. It is assumed that to generate an accurate picture, scattered records and documents must be stitched together into a bundle. With the answers provided by the

respondents and the available documents and literature, this fieldwork revealed that the way of conducting diplomacy between these two countries consistently remains open and liberal due to sovereign equality and non-interference in each other’s internal affairs. It is accurately observed that people-to-people relations have been consistently at a high level even before and after the establishment of diplomatic relations. The exchange of people and culture has become a tool with which to conduct diplomacy.

### References

- Bagale, K. 2011. Nepal-Japan Relations, *Nepal Council of World Affairs* (NCWA). Annual Journal 2010-2011: 47-50.
- Barua, H. B. 2002. *Pioneer Nepali Students in Japan: A Century Ago*. Kathmandu: Mandala Book Point.
- Embassy of Japan. 2003. *Japan-Nepal Relations*. Kathmandu: Japan Resource Center.
- Pradhan, Sunil. 2015. *Politics in Nepal: Monarchy, Democracy and Governance*. New Delhi: Manohar.
- Sharma, J. 2010. *Nepal-Japan Relations: Time for Strategic Partnership*. Kathmandu: Modern Printing Press.
- Tanaka, Masako. 2018. Extension of Nepalese Society in Japan? A Recent Trend of Migration from Nepal to Japan. PowerPoint presentation on 23rd March Embassy of Japan, Kathmandu.